OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国における在宅高齢者のQOLに関する研究(1) : 測定スケール作成の試み
Author(s)	王, 健
Citation	臨床死生学年報. 2001, 6, p. 12-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7858
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国における在宅高齢者のQOLに関する研究（1）

―測定スケール作成の試み―

王　　健

Key words：主観的QOL，重要度，満足度，在宅高齢者

Ⅰ　はじめに

近年、中国では高齢者人口の増大に加え、一人っ子政策の推進による老人扶養の問題によって、人口高齢化の問題が一層深刻になっている。このような背景の中で、高齢者問題に関する研究はますます注目されている。だが、中国国内の先行研究を見渡すと、人口の動向に関する調査や社会学の視点からの研究は数多く行われているが、心理学的なアプローチがまだ少ないのが現状である。

また、社会全体の経済レベルが向上するにつれて、高齢人口の生活の質が問われる時代がやってくると考えられる。高齢者のQuality of Life（以下QOLと略記）はどのような要素から構成されているか、それらをいかに評価するかは高齢者研究の大きな課題となってきている。

本研究の目的は、このような時代背景の中で、中国の高齢者の価値観を表現できるようなQOL測定スケールを作成し、その信頼性と妥当性を検討することであり、また、高齢者のQOLに及ぼす影響要因を把握することである。

Ⅱ　QOL測定スケールについて

指標の主・客観性によって、三つのタイプに分類することができる：主観的評価法、客観的評価法、主客観綜合評価法がある（赵、1997)。中国国内においては、現在は主に客観的評価法を重視している。社会学者卢・韦（1992）は以下のような論点を述べた。QOLは経済先進国から始まった概念である。アメリカのような経済水準が高い先進国においては、収入などの要素が幸福感への影響がなくなりつつあるため、QOLに関する研究の重きは人々の生活に対する評価、すなわち主観的QOLに移行している。一方、中国のような発展途上国では、経済収入などの物質的要素は依然としてQOLに及ぼす影響が大きいため、客観的QOLを重視すべきだ。

Lawton（1983）は高齢者のQOLの内容として次の四つをあげている。それらは行動能力・認知されたQOL・客観的に環境・心理的幸福感である。Lawtonが示したQOLの枠組みから、客観的指標は単なるQOLの一部であり、認知された主観的QOLも重視する必要があることが考えられる。

そこで、本研究では主観的要因や個人差を十分反映できるような主観的評価法を作成する

ことを重視し、その中でも特にQLI測定スケールに注目した。

1．QLIオリジナル版

QLIは「Quality of Life Index」の略語で、1984年に米国イリノイ州立大学の看護学者であるFerransとPowersによって開発され、多くの研究者によって活用されてきた代表的なQOL測定スケールの一つである。

この測定スケールは生活への満足感をQOLのバロメーターと考え、生活の各局面における「満足度」を重視している。また、満足度は個人の経験に基づき形成された主観的なものである。この主観性を測定に反映するために、生活側面における個人の重要さの意味づけ、すなわち「重要度」をQOL測定に導入している。

このような考えをQOLの測定に反映させるために、以下の計算式を用いて得点を算出している。

QLIの得点＝

[(満足度の得点－3.5)×重要度の得点]＋15

QLI得点を最低点0、最高点30におさめ、得点が高くなればなるほど、主観的に認知されたQOLは良いと判断される。

また、QLI測定スケールは四つの下位概念から構成されている。それぞれ「一般的満足度」「自己尊重」「健康および機能」「社会経済的側面」である。尺度は合計32項目から構成される。それぞれについて「重要度」と「満足度」をリッカート式に6段階で自己評価してもらう方式となっている。

2．QLI日本語版

QLI日本語版は松岡・山本・孫・浅野（1995）によって作成された。彼らはオリジナル版を翻訳し、項目の取捨選択を行っているため、オリジナル版が32項目であるのに対して、日本語版は25項目の構成となっている。高齢者大学の学生を対象に分析が行われており、信頼性と妥当性がいずれも満足できる数値になっている。

日本語版の尺度では四つの因子が得られ、それぞれ「生きがい」「対人関係」「社会環境」「健康」と解釈している。

Ⅲ　方法

1．QLI中国版の翻訳プロセス

文化の要素を考慮し、基本的に日本語版に基づき、QLI測定スケールの中国語版の作成を試みた。まず、25項目の日本語版の翻訳作業を行った。翻訳に際しては、直訳ではなくその意味に最も適合する中国語の表現を採用した。翻訳したものを使用し、20名前後の高齢者に予備調査を行い、更に中国国内の高齢者研究の専門家に意見を求め、最終的な翻訳版を作成した。

項目の取捨選択は以下のように行った。「心配事がない」「生活の目標を達成する」や「こころの平穏」等の項目は概念が曖昧で、高齢者にとって理解しづらいため削除した。また、中国人の価値観や性格などの要素を考慮して、「子供との関係」を「子供が親孝行する」に、

「はっきりした将来の見通し」を「将来の生活への準備」に、「家族の幸せ」と「家族の健康」を「子供世代の生活状況」に表現を変更した。更に中国特有の項目、すなわち「孫世代の幸せ」「長寿」および「食事・栄養」を独自に加えた。最後に「経済状況」を追加した。合計25項目の構成になっている。

2．対象

調査への協力が得られたのは92名であった。その中から、無回答が多い者を分析から除外したため、最終的な分析対象者数は79名である。その内訳は、男性は43名（54%）、女性は36名（46%）であった。

また、有効回答者の平均年齢は71.85歳（SD＝6.23）、最高齢者は86歳、最も若い人は61歳であった。また、回答者を「65歳未満」、「65歳以上75歳未満」、「75歳以上」に分類したところ、それぞれの比率は９%、64%、27%となっている。すなわち、今回の調査対象者の半分以上が前期高齢者である。

学歴については、未就学、小学校卒業、中学校卒業、高校卒業、短大以上卒業に分類した(Fig.1)。その結果、「小学校卒業」以下の低学歴の対象者は半分近くになっている。

家族類型に関しては、一人暮らし世帯は「独居」、夫婦のみの世帯は「夫婦」、配偶者の有無に関わらず有配偶子あるいは未婚子、孫、その他と同居している世帯は「同居」と表した(Fig.2)。

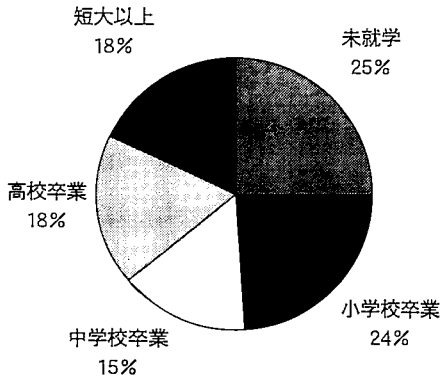

Fig.1 対象者の学歴（n=79）

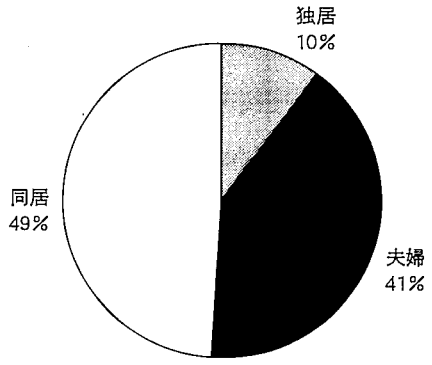

Fig.2 対象者の家族類型（n=79）

3．手続き

対象者抽出方法は次の通りである。まず、西安市の行政区域の六つの区から高齢者人口が最も多い蓮湖区を抽出した。次に、その中から高齢者人口が最も多い「街道弁事処」（日本の町に相当する）を「青年路弁事処」と「西四弁事処」を二つ抽出した。更にそれぞれの弁事処から五つずつ「街道委員会」（町内会）を指定した。10の「街道委員会」から等間隔法で10名ずつ60歳以上の高齢者を選び、調査対象者にした。

1990年の人口センサスのデータによると、65歳以上の人の識字率は25%である（中国人口生活质量再研究、1995)。調査項目を読めない高齢者が多いことを考慮して著者が直接高齢者自宅に訪ね、調査員記入法で実施した。なお、実施期間は2000年12月から2001年１月まで

である。

今回調査を行った西安市は内陸にある中規模の都市であり、中国の社会経済水準の中間に位置している。高齢者の人口比率も全国とほぼ同様である。したがって、今回の調査結果は中国の高齢者の一般状況を表すものと予測される。

Ⅳ　結果

1．中国語版QLI項目の因子分析

まず項目ごとの回答状況について検討した。「信仰・信心」項目は殆どの対象者は「重要ではない」「全く重要ではない」と回答した。「長寿」項目満足度に関しては回答しにくいため、殆どの対象者が無回答であった。また「性生活」項目も無回答が非常に多い。ゆえに、この三つの項目を因子構造の分析から除外した。

中国語版の因子構造を確認するために、オリジナル版の計算法にならって、満足度と重要度で算出された得点を使用し因子分析（最尤法、バリマックス回転）を行い（Table 1）、4因子が抽出された。

第1因子は「健康の維持」や「家族の中で役割を果たす」などの6項目から成り、「自己の要素」因子と名付けた。第2因子は「子供世代の生活状況」や「孫世代の幸せ」などの7項目から構成され、「他者の要素」と名付けた。第3因子は「社会治安」や「福祉サービス」などの5項目から構成され、「社会的要素」と命名した。第4因子は「友人との関係」や「配偶者との関係」などの4項目から成り、「ソーシャル・サポート」と名付けた。

2．中国語版QLI項目の信頼性・妥当性

Table 1 に示している通り、各因子の内的一貫性（α係数）は、それぞれ0.85、0.82、0.75、0.70になっている。全体の信頼性は$\alpha=0.91$であった。

妥当性の検証については、オリジナル版ではQLIの得点と「満足度」の合計点との相関によって判定を行っている。その方法にならい、QLI得点と「満足度」の合計得点とのピアソン積率相関係数を求めたところ、$r=0.99$（$p<.01$）と高い相関が認められた。

また、「満足度」合計点とQLIの各因子との相関係数は、それぞれ0.84、0.87、0.78、0.70になっている。

本研究では、調査の都合上、上述したQLI得点と「満足度」の合計得点との相関によって妥当性を検証する方法、および内容妥当性と内的一貫性信頼性についてのみ検討した。

3．ソーシャル・ネットワークとQLI得点との関連性

悩みがあった時、相談に乗ってもらえる人の数をあげてもらう質問項目を通して、対象者のソーシャル・ネットワーク（以下SNWと表する）の大きさを測定した。平均は4.54人（SD=2.7、N=71）で、最高は10人、最低は0人であった。全体の中の比率を用いて、SNWを「2人以下」、「3～5人」、「6人以上」との三群にわけ、QLI全体及び各因子への影響を一元配置分散分析で検証した。(Fig.3)

その結果、SNWの大きさは「自己の要素」、「他者の要素」、「社会的要素」の3因子及びQLI得点に影響を及ぼしていることがわかった。つまり2人以下のSNWを持っている人よ

Table1 :QLI項目因子分析の結果（バリマックス回転後）

因子名		項　目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4
	17)	身体的に自立している	.70	.22	-.07	.17
第一因子：	3)	健康の維持	.68	.25	.22	.13
自己の要素	15)	学習する機会がある	.60	-.10	.36	.24
（α=0.85）	9)	経済的に自立している	.55	.35	.08	.28
	2)	家族の中での役割を果たす	.50	.16	.23	.46
	7)	将来の生活への準備	.49	.28	.42	.32
	23)	経済状況	.40	.76	.14	.59
	16)	子供世代の生活状況	-.06	.64	.11	.43
第二因子：	24)	食事・栄養	.34	.57	.27	.12
他者の要素	13)	医療サービス	.29	.53	.49	.11
（α=0.82）	21)	住みよい住宅	.20	.52	.18	-.40
	20)	孫世代の幸せ	.18	.39	.32	.32
	4)	子供が親孝行する	.30	.37	.13	.30
	11)	社会治安	.01	.15	.66	-.04
第三因子：	1)	他の人の役に立つ	.17	.08	.60	.13
社会的要素	8)	福祉サービス	-.07	.52	.55	.31
（α=0.75）	19)	自分に誇りを持っている	.31	.23	.49	.33
	5)	余暇活動を楽しむ	.25	.18	.37	.29
第四因子：	25)	友人との関係	.19	.04	.07	.63
ソーシャルサポート	10)	近所との関係	.16	.08	.09	.48
（α=0.70）	6)	他人から精神的な支えがある	.36	.19	.34	.47
	14)	配偶者との関係	.31	.17	.13	43
		寄与率（%）	36.7	8.9	7.1	6.1
		累積寄与率（%）	36.7	45.6	52.7	58.9

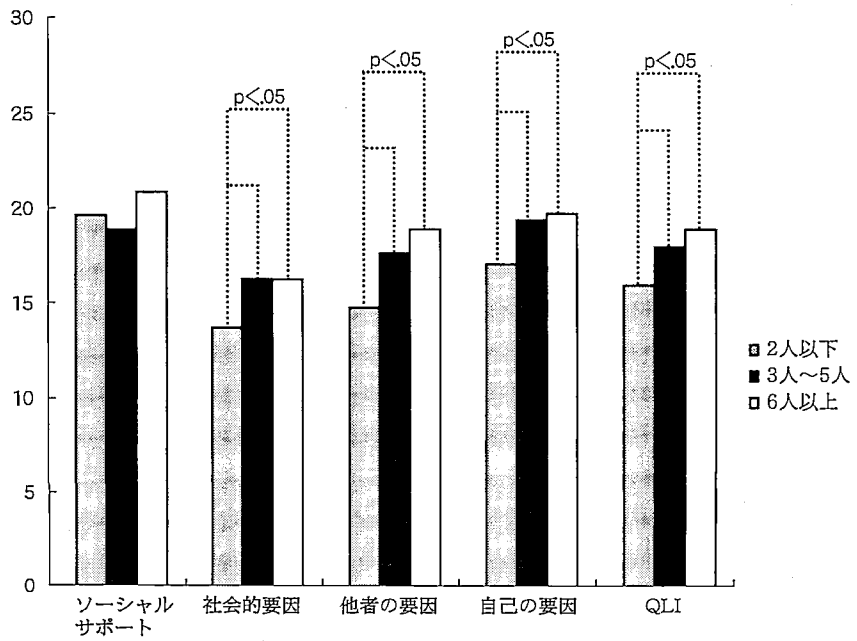

Fig.3:SNWの大きさがQLIに及ぼす影響

り３～５人の対象者よりまたは６人以上のSNWを持っている対象者の方はQLI得点が高くなる。一方、SNWの「ソーシャル・サポート」への影響はみられなかった。

４．職種別とQLI得点との関連性

邬（1999）は退職前の職種、性別および介護レベルによって、高齢者を階層別に分類している。全体的に高齢者のニーズを把握するために、まず各階層の高齢者のニーズを明確にする必要があると述べた。

この考え方にならい、本研究の対象者を「労働者」「行政幹部」「知識人」「その他」と分類した。本研究の対象者ではそれぞれ31名、28名、12名、８名である。「知識人」と「その他」は人数が少ないため、今回の分析から除外した。今後対象者を増やし、更なる検証が必要である。

「労働者」と「行政幹部」２種類について、QLI平均得点の職種による差を検証した。「労働者」の平均点は16.07（SD＝3.15）であり、「行政幹部」の平均点は18.43（SD＝2.68）であった。その結果、労働者は行政幹部よりもQLI得点が低かった（$t=3.08$, $df=57$, $p<.001$）。

Ⅴ　考察

１．因子分析の結果について

分析の結果、中国語版の因子構造はオリジナル版とも日本語版とも大きく異なっている。理由としては、翻訳の問題、文化の要素や調査実施上の問題などが考えられる。しかし、このような差異は、今回作成された中国語版QLIが中国の高齢者の実状を表していることと考えられる。中国人は昔から「身内之物、身外之物」という考え方がある。「身内之物」というのは生活においては最も基本的で、かつ自分自身がコントロールできるものである。「身外之物」というのは非常に身近に存在しているが、自分自身以外のものである。したがって、高齢者は自分の生活を評価するとき、以下のような思考経路をたどると考えられる。まず「健康の維持」や「経済的に自立している」など自分自身の要素を評価する。その次は、「子供世代の生活状況」や「孫世代の幸せ」など自分自身にとって近い存在の他者の要素を評価する。さらに、外側へ延長していくと、「社会治安」や「福祉サービス」など社会環境から影響を受けている要素を評価する。また、これらは「配偶者との関係」や「近所との関係」など、いわゆる自己と他者との関わり方によって、異なってくる。

したがって、今研究で認められた因子構造から、中国人の高齢者は身近なものから評価する傾向があると考えられる。

２．信頼性と妥当性について

信頼性の検証については、内的一貫性信頼性は数値が得られたが、検査－再検査法による安定性の検証についても、今後行う必要がある。

また、妥当性の検証については、QLI得点と「満足度」の合計点との間に高い相関が認められたが、基準関連妥当性については検討していない。今後の課題としたい。

3．SWNの大きさとQLI得点との関連性について

SNWの大きさとQLI得点との関連性を分析した結果、２人以下の対象者より３～５人または６人以上のSNWを持っている人の方はQLI得点が高くなるという傾向が見られた。実際に、調査を実施している中、殆どの高齢者はこの質問項目に対して、配偶者と子供の数を合わせて回答した傾向が見られた。このことからも今回の調査で測定されたSNWの大きさが対象者の子供の数を表していると推測出きる。

子供数が多い高齢者の方が健康な心理的状態でいる可能性が高い、また子供数が多いほど、幸福感がより強く感じられる傾向がある（李・張、1997)。この先行研究の結果と併せて考察すると、今回の調査結果から、３～５人以上または６人以上の成人子を持っている高齢者は子供の数が多いだけに、ある種の安心感があって、QOLに正の影響を与えるのではないだろうかと考えられる。

一方、SNWの「ソーシャル・サポート」因子への影響はみられなかった。野口（1991）は、SNWが対人関係の構造的側面に着目するのに対して、ソーシャル・サポートはその機能的側面に着目しているとして両者の違いを指摘している。また、「都市部における高齢者の活動と社会関係」の研究（1994）の中では、SNWは個人がどのような人と、どの程度交流しているのかを示しているのに対して、ソーシャル・サポートはネットワークを基盤にどのような交換が行われているのかを表していると考察している。したがって、SNWの大きさがソーシャル・サポートの得点への影響が見られなかった結果から、対人交流の量的な増大は必ずしも質的な改善に影響を及ぼすとはいえないことが考えられる。

「人口大国」といわれる中国は、七十年代の末から「一人っ子」政策がはじまった。人口抑制政策が成功すると同時に、中国の世代構造も変化し、「４－２－１」の構造になると予測されている。つまり、将来一人の子供は二人の親と四人の祖父母を抱える状態になる(Olson, 1988)。当然のように高齢者へのサポートは量的には減少する。そのために、いかに質的なサポートを充実していくかは一層重要な課題になってくる。今後の研究においては、個人どの人とどの程度交流をしているかというSNWの概念以上に、ネットワークを基盤にどのような交換が行われているか、いわゆる質的な面にもっと注目する必要があると考えられる。

また、QLIに影響を及ぼすほかの要因についての検討は、今回の調査対象者が79名という少人数であるため、今回の報告において分析を行わなかった。今後対象者を増やした上で再検討する余地があると思われる。

4．職種とQLI得点との関連性について

職種別にQLIの平均得点をみると、労働者は行政幹部よりも有意に低かった。

冯・戴（1995）は教育水準が低い高齢者は生活満足度が低いことを指摘している。また、邬（1999）が高齢者を階層別に分類したところ、「行政幹部」であった高齢者は教育水準が高い、社会的地位が高い、経済状況が良好であるのに対して、「労働者」であった高齢者は教育水準が低い、社会的地位が低いことが明らかにされている。また、近年改革開放の影響で多くの国営企業は経営が悪化し、退職金が給付できなくなっており、そこに勤めていた「労働者」層の高齢者の多くが厳しい生活状況に置かれるようになったという問題も示されている。今回の研究結果を先行研究の結果とも併せて考察すると、中国の高齢者層において

は、教育水準や退職前の職種などによって、現在の生活状況が異なり、さまざまな社会階層が存在していると言える。そして、その階層によって、高齢者のQOLの内容も異なってくると思われる。

今後、高齢者に関する政策を立案するとき、まず「労働者」層の高齢者の生活状況を改善する必要があると考えられる。また、研究の方法論としては、中国の高齢者の全体像を把握するために、まず社会階層別の高齢者の状況を明確にすることがより妥当ではないかと考えられる。

5．今後の課題

今回の研究では、アメリカや日本などの先進国において検証された尺度を使用したため、いくつかの問題点が指摘され、今後の課題としたい。

まず、高齢者の教育水準を十分考慮に入れるべきである。実際に、今回の調査においては、高齢者は一部の質問項目や6件法の回答様式を十分理解出来なかったことがわかった。平均的に学歴が低い高齢者層に対して、もっと理解しやすい質問項目や回答様式が必要だと思われる。

また、外国において検証された尺度は中国で用いる場合、外国に近い条件で使用することが望ましいと考えられる。現在、中国の老年大学に通学している高齢者は殆ど教育水準が高く、経済的にも恵まれている高齢者である。そして、これからの中国は急速な経済発展を遂げると同時に、高齢者全体は学歴が高くなり、経済状況が今以上に改善されることが予想される。したがって、QLI中国版は中国の老年大学の学生を対象に調査を行うと、尺度としての妥当性がより高まることが期待できる。さらに、それによって中国の高齢者の将来像が予測することができると思われる。

Ⅵ　まとめ

本研究では、中国における在宅高齢者のQOLを測定する尺度を作成し、その信頼性および妥当性を検証した。また、SNWの大きさがQLI得点に及ぼす影響を検討した。

分析の結果、「自己の要素」「他者の要素」「社会的要素」「ソーシャル・サポート」の4つの因子が得られ、満足できる信頼性と妥当性は検証されている。また、SNWの大きさがQLI得点に及ぼす影響がみられた。すなわち、2人以下のSNWを持っている人より3～5人または6人以上のSNWを持っている人のほうはQLI得点が高くなる。

今回の調査では、データ数が少ないため、年齢や経済状況がQLI得点に及ぼす影響を検討しなかったが、今後サンプル数を増やしてさらなる調査が必要であると考えられる。

【引用文献】

冯立天・戴星翼（主编）1995　中国人口生活质量再研究高等教育出版社

Ferrans, C. & Powers, M　1985　Quality of Index : Development and psychometric properties. *Advances in Nursing Science,* 8, 15-24.

James, E. B　1991　The Concept and Measurement of Quality of Life in the Frail

Elderly. Academic Press, Inc.（三谷嘉明　他（訳）1998　虚弱な高齢者のQOL－その概念と測定　医歯薬出版株式会社）

Jiang, L.　1995　Changing kinship structure and its implications for old-age support in urban and rural china. Population Studies, 49, 127-145.

李建新・张风雨　1997　城市老年人心理健康及其相关因素　中国人口科学, 3, 29-35.

卢淑华・韦鲁英　1992　生活质量主客观指标作用机制研究　中国社会科学, 1, 1-16.

野口裕二　1991　高齢者のソーシャル・サポート：その概念と測定　社会老年学、34, 37-47.

Olson, P. 1987 A model of eldercare in the People's Republic of China. International Journal of Aging and Human Development, 24, 279-300.

松岡克尚・山本誠・孫良・浅野仁　1995　QOL測定スケール（日本語版QLI）の開発　関西学院大学社会学部紀要、72, 113-133.

赵细康　1997　农村老年人生活质量主观评价分析　人口与经济、6,15-20.

邬沧萍（主编）　1999　社会老年学　中国人民大学出版社